

26. 業務量減少に向け電子パス使用病棟を増やすための取り組み

近畿大学医学部附属病院 森 佳恵

【実践の概要】

平成 19 年度、大阪府看護協会が 5 年以上同一施設で働いている看護職を対象に「看護職員の離職の実態と要因」について調査した結果、「看護職員数が充足してなくて忙しい」、「仕事内容と仕事量が多い」が上位を占めていた。平成 19 年度、当院の退職率は、15.1%（途中退職者含む）であり、退職理由として、①結婚・出産、②業務量が多くしんどいということであった。入院患者が一日 10 人を超える病棟もあり、毎年 100 名を超える新採用者を迎えることも各看護単位の多忙さに拍車をかけているといえる。そんな中、退職者を減らすためには、業務量を減らす手立てが必要と考えた。

当院は、平成 15 年からクリニカルパス（以下パス）を導入しており、紙パスの登録件数は 147 件である。平成 20 年 1 月から電子カルテが導入となり、平成 20 年 5 月からパイロットスタディーとして外科病棟で電子パス運用が始まっている。10 月に眼科と産婦人科での使用が始まったが、電子パスを使用している病棟は現在 3 病棟のみであり、紙パスと電子パスを合わせたパス使用率は 20%と少ない。電子パスを使用することで、入院時の指示受け、記録の簡略化が図れ、業務量減少に繋がるのではないかと考えた。院内にはパス委員会があり看護部にも 3 名の委員が存在するが、積極的に機能しているとはいえず、誰かがリーダーシップをとり院内電子パス推進を図っていく必要があると考えた。

【実行計画】

院内で電子パス使用病棟を増やすためには、パイロットスタディーとして運用している病棟の現状の情報提供が必要であると考えた。医事課、医師、看護部パス委員に委員会開催を働きかける→電子パスを増やすためには、パイロットスタディーとして使用中の電子パス作成・運用手順の整備を行う。電子パス使用率が高い他施設訪問を行い電子パス使用数を増やすための示唆を得る→クリニカルパス委員会開催後、看護長会議でクリニカルパス委員会の報告を看護部委員より行ってもらう情報提供を行う→電子パス導入している 3 部署を訪問し、電子パス使用のメリットについての情報を得、電子パス運用可能と思われる病棟に情報提供を行い、電子パスを 3 病棟は導入出来るようにする。

【結果およびまとめ】

電子パス使用病棟を増やすためにまず、院内クリニカルパス委員会が開催されるよう医事課パス担当者、パス委員長（医師）、看護部パス委員に働きかけ、12 月 22 日に開催された。代謝内科、消化器内科、小児科、泌尿器科、麻酔科、救命、放射線科以外の診療科の医師の出席があり、現在まで電子パス運用してきた中での問題点、電子パス作成する際の紙パスとの変更点など電子パス運用について説明が行われた。その中で、電子パス運用手順（医事課パス担当者作成）の提示が行われた。

まず、電子パス作成の権限者の登録申請を 1 月 27 日までにを行うよう伝達された。12 月 25 日、医事課パス担当者と共に電子パス 80%以上使用施設訪問、1 月 16 日、70%以上電子パス使用施設訪問を行い、電子パス使用数を増やすためにはどうすれば良いかの示唆を得た。2 月 9 日時点での進捗状況として、院内に電子パス作成権限登録者の申請について、サマリー記載時パス使用の有無を登録することについて医学情報部から発信された。また、診療部長会議の中で電子パス使用の推奨についての話しが出された。今回、2 月に病院機能評価を控え、その準備が優先されていることもあり、電子パス登録まで至っていないが、他施設訪問の結果を踏まえ、電子パスについての全職員対象に説明会を行うこと、患者用パスを入院診療計画書として使用できるようフォーマットを修正すること、電子パス運用手順を完成させることを課題とする。地道に行動を起こし、今後、院内での電子パス使用率を 30%にしていきたい。